

# 重松春香宛古川松根書簡等

三ツ松 誠

①

(封)

春香様

松根

平信

春香様

松根

小郡人の手紙一通拝見、  
返呈仕候、ちくしは  
社友へ配分可仕候、御詠  
又々愚評返呈、中々  
秋夕のまことに克  
不已候又

着馴こしーの御

歌は、句の下く文字にて  
こそおさへたるゆへには  
句の中に打こみ候へば、さまでは  
無之哉、試にいはず、  
さむく成にし秋の風哉

カクスレバ着馴こしを着馴つると

スベシ、く文字二ツあれば也

又さむくも風の成にける哉、

かやうにいはずよからん

か、猶唯々こころみ給へ

夢

かけてだにおもはぬ事の見ゆる哉  
夢は心の外にや有らん

朽木

山がらのこもるうつほと成はてゝ  
朽木や何のくち木成らむ

鐘

はるぐとひゞきつたへし  
高砂のをのへの鐘も幾代へぬらん

恋の歌中に

袖かはすよはまた深きちぎりとも  
しらでや鳥のやどりすらん

遅

とことにはうてどあふれどかひなきは  
おそき心の約にぞ有りける

近詠ども御一笑可被下候

以上

②十六日

御詠拝見思ふ事ども

かきてかし、返上仕候

愚詠少々

月

まちをしみ人は心をつくすとも

しらでや月の空に行らん

夜思花

打とけてねられぬものは桜がり

あすとさだめしこよひ也けり

春月暁静

よもすがらかすみかすみて明るをも

ひとりいそがぬ月のかげ哉

海路

限りなく心ぼそきは行々も

舟路の空のくるゝ也けり

○

花ちりし若ばがくれに飛蝶は

きのふの春の夢や恋しき

○過日、紀の諸平より書通あり、

歌もあり、其内ひとつふたつ

余寒

野を寒み若なつむ子が紬にだに

たちもとまらぬはる霞哉

花遅き嵐のまどのしのすだれ

さらにはるをへだてはつらん

さしかへるはるのよどこのひとりねに

花まつばかり久しきはなし

猶数首あり、近日おめに

かくべく候、先は御答のみ

早々

十六日

なら園

③十二月二十四日

先達てよりきびしく

御わづらひのよしは承り候、

なに分程へにけり候所にて

兎角御無沙汰のみ

罷過、家内よりも其事のみ

申つづけ候事ニ御座候、

今程追日御快方之よし、

尚又此寒中御保

懽專要奉存候、御詠ども

数首御見せ被下、感

吟仕候、例之失敬ながら

愚評返呈仕候、百人首

は只数をみて候のみにて

どれも／＼おなじ様なる

事のみ、御めにかけて候ほどの

事もなく候へ共、命にまかせ

百将詠一同二冊差出  
申候、御慰にも可相成哉に被存候、  
先は右御答迄、早々御坐候、  
不宣

極月廿四日 なら園

④三月二十四日

花も散、鳥もきなかず、  
はるたけていとさふぐしき  
世の気色に御座候、如何  
御わたり候哉、折にふれて  
は、ちと御来訪待候

○一□□師之詠、御書

とめの分拝見仕度、

桂園社中之歌

あつめ候中へ入置度

候故希候

○御近詠も候はゞ、ちと

伺ひたく候、乍失敬

御名をとりて

何故に

うとくは

人の成ぬらん

とひこん

道も

はるか

ならぬを  
萬は拝顔申残候  
頓首

弥生廿四日

⑤包紙

重松菅二様 古川与一  
ぬれ用心

⑥五月九日

御詠草例之  
愚意書しるし候、  
返呈仕候、其外最  
前御詠一冊、近藤の  
一存ともに返上仕候、  
御落手可被下候、何れ  
之内御出之折と  
申残候、頓首

皐月九日

寧楽園

⑦

○大徳寺大綱が  
自画讃、脇方にて  
一見おもしろく出来  
候を書付候

(瓢箪図)

瓢々、汝真瓜の位もなく西  
 瓜の暑をはらふ徳もなし、  
 しかれど気の軽く、中むなし  
 くて、無よくなれば、仙人も汝を  
 友として、酒をいれて腰に  
 携へ、あるは駒を出してたの  
 しめり、汝瓜の類にいて庖  
 丁の難にあはざるは智也、鯨を  
 をさへてのがさしむるは仁也、  
 羽柴公の馬印となりて強  
 敵をくだくは勇也、汝性者  
 善也といふべし  
 うか／＼とくらすやふでも瓢箪の  
 むねのあたりにぐくゝりあり  
 八十八翁大綱(花押)  
 ○近頃の愚詠  
 芸者  
 取いだすみつの緒ことに  
 諸人の心をまつやひか  
 んとすらん  
 辻君  
 行へなき身の末たどる  
 八ちまたに立てたれを  
 またんとすらむ

⑧

ともすればたまるおもひを身のよそに  
 しぼし吹なすけぶり草哉  
 君が代の民のかまどのそれならで  
 たてぬ家なき烟草かな

茶

春雨の折しづかなるまどゐには  
 まづこのめをぞにるべかりける

三弦

たをやめが引手をかしき三の緒に  
 うかれぬ人はあらじとぞ思ふ  
 花やぎし里のゆふべは三つのをの  
 なべて聞えぬ高樓もなし

などよみすて申候

御笑評可被下候

なら園

⑨

静かにもすむらん人の心さへ  
 おもひやらるゝ白川の水  
 花もよし月も

よし田の

山かげは

⑩包紙

重松菅二様 古川与一

⑪包紙

重松菅二様 古川与一

貴答

廿三日

重松菅二様 古川与一

⑫包紙

重松菅二様 古川与一

急用

(本野克彦氏所蔵)

⑬二十三日

信武詠草加除返上

致候、いまだ初心二而

おもふまゝにもなり不

申候、○御詠草例

之愚意取添返上仕候、

先日よりは度々御出之

よしながら、いつも留守中

失敬に相成候、非番之折

何卒御出奉待候

近日脇方二而可出有之

筈也兼題愚詠

寂々春将暮

花ちりてむなしき枝

にぬるてふの夢のうち

にやはるは行らん、と致申候

御評可被下候、以上

⑭八月十九日

拜見、久々御疎遠

御ゆかしく奉存候、どふか

御外出も出来かね候趣、

先日満春より承り候、

御詠共拜<sup>(汚)</sup>□、例之

愚評返呈仕候、御国

歌人まことに稀になれば、

何卒御うち捨無様

祈申候、周芳小郡より

之一封手に入候段、さし

出申候、近頃人物題詠出

致候を取出し候分

書付、御なぐさみにさし出候、

猶数多けれど、さまでは

とて、筆を打置候、御都

合よき折は御入来

待入候、先は右御答

迄、早々頓首

八月十九日

重松様 檜園

⑮十一日

先夜は御馳走頂戴、  
緩々仕、忝奉謝候、  
其折御約束之短尺  
百枚、存合にまかせ呈上  
仕候、御落手可被下候、以上  
十一日

⑩十月二十四日

御無事御わたり候条、  
欣賀之至奉存候、松根も何事  
なく、らし申候、色々御詠  
拝見、かたじけなく、小車  
之事御尋、とかく繁多  
にてめぐりかね候、しかし  
いまも尚めぐるとなしに  
めぐる哉、すてゝもすてぬ  
道の小車  
先日一会相催申候、其節之  
愚詠

名所時雨

も上川風さだまらぬ浮雲の  
のぼればくだる夕しぐれ哉  
樹陰寒草  
下松の千よのかげなる浅ぢさへ  
霜にはあへずうらがれにけり  
又北御殿御当座  
冬衣

冬衣いくよさむさをかさぬらん  
袖さしかはす人もなきみは

冬筵

草まくら霜をかたしく  
とけてぬるよのあらばこそ  
さむしろに  
あらめ

例之なぐり、つまらぬ事も御座候  
松根

十月廿四日認

桜園君

⑪五月二十四日 包紙

五月廿四日認

さが ふしみ

重松郡左衛門様 古川与一  
平信

⑫五日

梅百首之中  
御みせ被下なかにいと  
おもしろきも数多  
相見え申候、則批点  
返呈仕候  
海辺春興  
沖つなみかすむ磯わ

におりたちて花桜貝  
いざやひろはん

庵春雨

けふもまたくらしやわ

びんさゝのやの朝げ

しづかに春雨ぞふる

列見

おしなべてひとつみどり

に見る袖のいろのけぢめを

だれさだむらん

御評奉願候、以上

五日

⑱

狐

小雨ふるもりのこのまに

見ゆる哉よめむかへする

狐火のかげ

犬

うつ杖の下をくぐりてあげまき

にともなひあそぶ里の犬哉

猫

影遠く月はかすみてあづまやの

のきに更行から猫の声

近詠也

過日御出にて御はなし

の一条、早々向方出入  
之者を以申入置候、猶又

山崎、今泉へも申談じ

直塚良助へ直々申

込候様申置候故、旁

一寸申上候、以上

与一

古川与一

(佐賀大学地域学歴史文化研究センター所蔵)

古川松根檜園和歌関係書簡 092.192 F93)